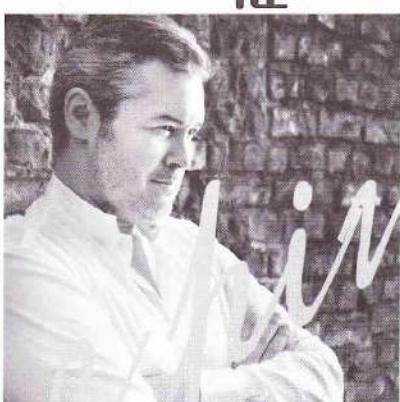


ヴァデイム・レーピン

故郷ノヴォシビルスクの音楽祭を日本で開催

取材・文=中東生
Text=Shinobu Naka

かつて「プロン門」下のヴァイオリンの神童として世界を沸かせた、ヴァデイム・レーピンも今年の8月で45歳を迎える。そのレーピンが2014年から故郷のノヴォシビルスクで音楽監督として行っている「トランスリシベリア芸術祭」を、今年日本でもツアード開催することになった。ちなみにレーピンが現在使用している楽器は、1733年製のストラディヴァリウス「ロード」。



© Gela Megrelidze

Interview

プロンとの出会い、
大好きな日本

——木琴、ハモニカ、アコーディオンのクラスが空いていなかつたからヴァイオリンを始めたというのは本当ですか。

——他の子供たちのように、ただ遊んでいたいなどという葛藤はありませんでしたか。

R その頃のスケジュールといえば、学校、ヴァイオリン、ピアノ、帰宅後学校の宿題、毎日それだけでしたが、私は早いうちから舞台というものを知ったのです。

——舞台に上がるためならば、他の子供たちと遊ぶ時間を犠牲にするなど、容易なことでした。それほど舞台が好きでした。

——初来日の印象は如何でしたか。

R それはそれは素晴らしい思い出です。ジャパン・アーツの招聘で、ゲルギエフとキーシンと1ヶ月日本に滞在しましたが、コンサートは4回だけだったので、あとは温泉や観光に連れて行ってもらいました。その時から日本が大好きです。

——トランスリシベリア芸術祭について

——この芸術祭を始めたきっかけは何ですか。

R 自分の生まれ故郷であり、17歳まで勉強したノヴォシビルスクを世界にもっと知つてもらいたいと思ったのがきっかけですが、この街で大切な音楽仲間たちが会えたらしいなあと模索していました。

3年ほど策を練っていた頃、新しいホールが建つことになり、この機会を逃してはいけない、と決行しました。そのアルノルド・カツツコンサートホールは、ノヴォシビルスク交響楽団の創設者の名前

台に立ち、そこでプロン先生と出会いました。その時から日本が大好きです。

——日本のどこが特に好きですか。

R 全部です（笑）。ファンの方々、素晴らしいコンサートホール、伝統、料理。もう数えきれないほど訪日しましたし、今年のようく年に2、3回日本を訪れる年もありますが、今まで、まだ一度も嫌な思い出はありません。

——日本での演奏はいかがですか。

R あるだけで第1回目は一流の音楽家であるだけでなく、私の真の友人と言えるケント・ナガノに振ってもらいました。彼はアメリカ人といつても、日本の血をひいているわけですから、音楽祭と日本を繋いでくれるのではないかと期待しています。その第1回目はサンクトペテルブルクとモスクワへ遠征に出掛ける規模でしたが、第2回ではシベリアの小都市も回れるようになりました。第3回目の今回はようやくアジアツアーができるので本当に嬉しいです。

——今回の日本ツアードでは札幌にも行かれるますが、ノヴォシビルスクと姉妹都市の関係にあるこの街には、今年20周年を迎えるシベリア・北海道文化センター

もあります。そのような背景も含め、政

て、「東西を結ぶ」と謳つて作られたのと同じように、この音楽祭もそのような目標を掲げています。そしてこの音楽祭を通じて、私の大好きな日本に行かれる回数も増えたらいいなど自論んでいました（笑）。

そんなわけで第1回目は一流の音楽家であるだけなく、私の真の友人と言えるケント・ナガノに振ってもらいました。彼はアメリカ人といつても、日本の血をひいているわけですから、音楽祭と日本を繋いでくれるのではないかと期待しています。その第1回目はサンクトペテルブルクとモスクワへ遠征に出掛ける規模でしたが、第2回ではシベリアの小都市も回れるようになりました。第3回目の今回はようやくアジアツアーができるので本当に嬉しいです。

——今回の日本ツアードでは札幌にも行かれるますが、ノヴォシビルスクと姉妹都市の関係にあるこの街には、今年20周年を迎えるシベリア・北海道文化センターもあります。そのような背景も含め、政

■公演情報

○トランス=シベリア芸術祭in Japan 2016 他
 ●ザハーロフ&レーピン「頬死の白鳥」
 ○日時・会場)6月11日17時・愛知県芸術劇場コンサートホール(問合せ)中京テレビ事業 052・957・3333
 ●ザハーロフ&レーピン夢の共演
 ○日時・会場)6月15日19時・ベイシア文化ホール(前橋)〈問合せ〉前橋市民文化会館 027・221・4321
 ○日時・会場)6月17日19時・サントリーホール(問合せ)AMATI 03・3560・3010
 ●レーピン&諷訪内＆マイスキー＆ルガーンスキイ
 ○日時・会場)6月18日18時・サントリーホール(問合せ)AMATI 03・3560・3010
 ○日時・会場)6月20日・札幌コンサートホールKitara大ホール(問合せ)オフィス・ワン 011・612・8696
 ●レーピン&マイスキー協奏曲のタペ
 ○日時)6月22日19時(会場)東京オペラシティコンサートホール(共演)広上淳一(指揮)、日フィル(問合せ)AMATI 03・3560・3010

R 政治的に理解し合えない場合でも、コンサートや展覧会、劇場を通して、人と人が解り合えることが一番歐美な解決法だと思います。そのような役割を担うべきでした。

R 政治的な意味合いも音楽祭を始めるきっかけでした。

—ヴァイオリニストとして精進を続ける日々の中で、音楽祭を主宰するといふことは並大抵なことではないと思いますが、その一番の喜びは何ですか。

R 本当に大変なことです。聴衆の皆さんのが感動してくれている時の目を見る瞬間が、至福の時です。

—芸術に大きな変化をもたらした家族

—ご自身のご経験では、子供を持つということは芸術に影響を及ぼしますか。

R それはもう、大きな変化をもたらします。自分のエモーションを表現する別次元が与えられ、別の色彩を与えてされました。

—奥様(バレリーナのスヴェトラナ・ザハーロワ)との共演もとても興味深い企画ですが、そのアイデアはどのように生まれたのですか。

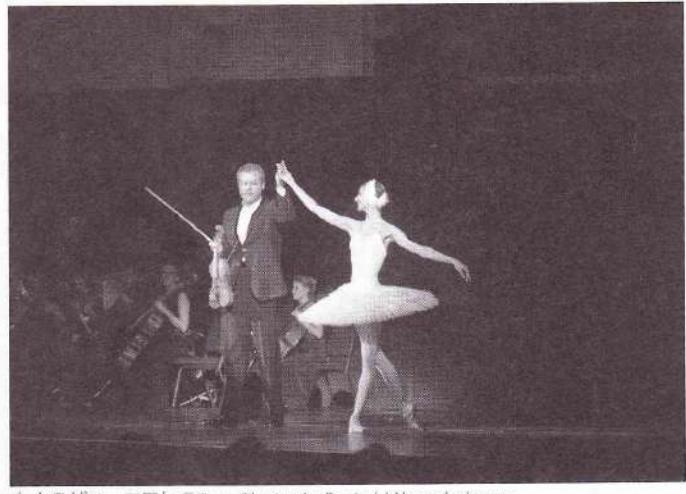
R 実は初めは乗り気ではなかったのですが、スイスのローザンヌ近郊でルーナ・クラッシックというフェスティヴァルをしているハゼリン・ヴァン・スヴェイ女史に長い間説得され、仕方なくやつてみたら、自分たちにとても合っていたのです。もちろん彼女との出会いは、この人生になくてはならないものなのです。普通バレリーナと共に演奏するだけではなく、父親としての温かい微笑みを見せ、愛するパートナーとの共演を語り、芸術祭の発展に邁進する複合的な

かつての神童がヴァイオリニストとしてだけでなく、父親としての温かい微笑みを見せ、愛するパートナーとの共演を語り、芸術祭の発展に邁進する複合的な音楽家として成長し続いていると実感できたインタビューだった。

「ノヴォシビルスクを世界にもっと知ってもらいたいと思ったのが音楽祭を主宰したきっかけです」



トランス=シベリア芸術祭でのレーピン ©Trans-Siberian Art Festival / Alexander Ivanov



夫人のザハーロワと ©Trans-Siberian Art Festival / Alexander Ivanov

手に合わせようとしなくてうまくテンポが重なります。其演の機会は少ないのですが、今年は「トランス=シベリア芸術祭」で、そしてその後も、日本の皆様にご披露できるのが楽しみです。

—今後のご活動について教えて下さい。

R 私たちの職業は、先へ進めば進むほど難しくなっていく職業です。子供の頃から弾いている曲に、いつも新しい観点から対峙しなければならないからです。それだけにどんどん興味深くなっていくとも言えます。それに歳を重ねていくと、色々な面で無理がきかなくなっています。そういう中で今一番お話ししたいのは、ミランが私のために書いてくれた協奏曲を、もうすぐグラスゴーで録音するということです。皆様に聴いて頂けるのは来年になりますが、ドイツ・グラモフォン時代に知り合ったレコード会社から発売されます。デューサーが独立して作ったオニックスというレコード会社から発売されます。共演はロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団で作曲家と同郷のオーケストラなので、一番適切な音が出せると確信しています。今からとても楽しみです。